特殊講義・大学生協寄付講座

戦争と平和を問いなおす

── 受講のお申し込みについて ──

一昨年に、立命館大学のご協力により
寄付講座「戦争と平和を問いなおす」を開講していただくことになりました。
この講座は、立命館大学をはじめ
大学コンソーシアム京都加盟大学・短期大学の
学生を対象とした単位互換授業です。
また、聴講を希望される市民の方の来聴を歓迎いたします。

開講日時

2014年4月11日(金)～7月25日(金)の各金曜日
18：10～19：40

会　場

キャンパスプラザ京都／4階第3講義室

受講対象

単位互換参加大学(立命館大学を含む約50校)に在籍する学生をはじめ、一般社会人等、平和に関心を抱き、学びたい方。

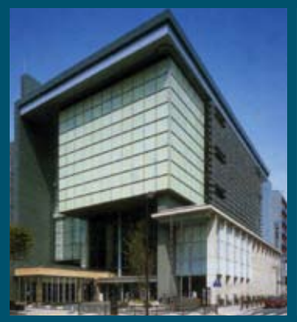
単位互換制度を利用される方へ

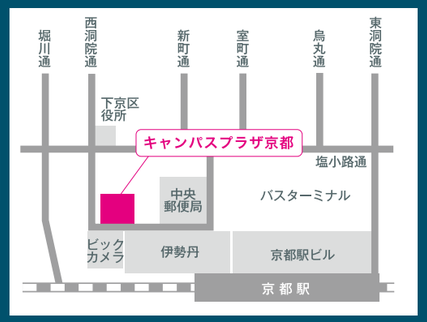
単位互換制度とは、加盟大学・短期大学の学生であれば「他大学が提供する正規科目を受講することができ、それが自大学で単位認定される制度」です。
なお、単位認定のルールは大学・短期大学によって異なります。
詳細は「単位互換履修生募集ガイド」をご覧ください。
なお、出願受付は4月上旬までです。(詳しい日時は所属大学により異なります)
出願票は所属大学の担当窓口に提出してください.

京(みやこ)カレッジを利用される方へ

京(みやこ)カレッジ募集ガイドにつきましては、下記宛へお問い合わせください。

公益財団法人 大学コンソーシアム京都 教育事業部 京カレッジ係
tel 075-353-9140（火曜日～日曜日　9時～17時　月曜日休館）
[E-mail] mc-guide@consortium.or.jp





□ その他お問い合わせ

univ CO OP 全国大学生活協同組合連合会
京滋(けいじ)・奈良(なら)ブロック　事務局
〒606-8106　京都市左京区高野玉岡町23-3
Tel 075-712-1156
[E-mail] knb@ma2.seikyou.ne.jp
[URL] http://ksnet.u-coop.net/

□ 会場

京都市下京区西洞院通塩小路下ル
キャンパスプラザ京都

特殊講義・大学生協寄付講座

立命館大学
大学コンソーシアム京都

戦争と平和を問いなおす

2014年度 前期

[日時] 4月11日～7月25日 各金曜日 6時限(18:10-19:40)
[会場] キャンパスプラザ京都

担当者 ／ 君島東彦（立命館大学）ほか

この科目は受講生に対する知識の注入をおよそ目的としていない。
教育とは知識の注入ではない。
教育とは自らの生き方・世界観を絶えず吟味し変革していくプロセスであり、教師はその産婆である。
この講義は学生諸君が自ら化学反応を起こすための触媒である。
この講義が学生諸君の世界認識・自己変革の手助けとなることを切に願っている。
また、学問とは常識批判である。学生諸君の「先入観を裏切る」講義をめざしている。

授業の概要

この科目は大学コンソーシアム京都に加盟する大学の1回生以上を対象とする平和学講義である。平和に関する思想は古くからあり、また哲学、政治学、法学、史学などの諸学問が平和について考察することも古くからあるが、他の学問から区別される固有の学問として平和学が始まったのは1950年代の冷戦期である。平和学とは「戦争・暴力の原因と平和の条件を探究する学問」であるといわれる。平和学は米ソ核戦争による世界の破滅を防ぐための知的営為として始まった。1950 年代に他の学問から区別される固有の学問として始まったとはいえ、平和学はさまざまな学問的方法を使う学際性を特徴としている。

この科目は、大学生協寄付講座である。大学生協からの寄付によって、全国から適任の講師を招くことが可能になった。毎週、いろいろな専門分野の専門家を講師として招いて、戦争と平和を問いなおしたいと思う。戦争と平和については、これまでもさまざまな研究や考察があり、「もうわかっている」「聞き飽きた」「旧態依然」という感想を持っている人が少なくないかもしれない。この科目は、そのようなマンネリに挑戦し、戦争と平和の問題を新たな角度から考えることをめざしている。

平和学は知識を獲得して終わる学問ではない。平和学とは、自分自身の生き方を変革し、世界を平和的に変革するプロジェクトである。この科目の履修を終えた学生諸君が、このプロジェクトに参加することを切望している。平和学が発展するばかりで、世界が平和にならないのでは意味がない。世界の暴力を少しずつ克服するために、この科目が何らかの役に立つならば、担当者としてうれしく思う。

到達目標

- アジア太平洋戦争の経験を戦後の日本人はどのようにとらえたのか、考察する。
- アメリカ合衆国の戦争およびその帝国的行動について検討する。
- 安全保障をとらえ直す。
- 平和をつくる道筋 ── 兵役拒否、批判的ジャーナリズム、協同組合、NGO活動等 ── について考える。

評価方法

レポートを 3 回提出してもらい、それらにもとづいて成績評価する。レポート提出締切は、第1回5月16日、第2回6月27日、第3回7月25日である。それぞれ、教室での直接提出のみ受け付ける。

● 授業スケジュール

第1回　4月11日（金）

君島東彦［立命館大学国際関係学部教授］

戦争と平和を問いなおす
―平和学講座をはじめる

平和学とは戦争・暴力の原因と平和の条件を探究する学問である。平和学はどのようにして始まったのか、平和学の特徴は何か、世界の平和学の現状等について述べた後、この講座の趣旨、全体構成について説明する。

第2回　4月18日（金）

高岡裕之［関西学院大学文学部教授］

文化人のアジア太平洋戦争

一般に「戦争」と「文化」は相容れない関係にあると思われているが、総力戦となった昭和の戦争では、文化の役割が重視され、文化に対する統制と組織的動員が目指された。そこでは、文化に対する統制・弾圧が強化される一方、少なからぬ文化人の体制への積極的参加もみられた。本講では、文芸・絵画・漫画などの具体的事例を取り上げることにより、「戦争」と「文化」の関係について考えてみたい。

第3回　4月25日（金）

平岡敬［元広島市長］

ヒロシマ再考

広島は戦後一貫して核兵器廃絶と世界平和の確立を訴えてきたが、まだ「核兵器のない世界」は実現しない。なぜ広島の訴えは世界に届かないのか。死者の声に耳を傾けず、米国の原爆投下責任や自らの戦争責任を問わなかったのはなぜか。なぜ原子力平和利用に希望を抱いたのか。広島の平和思想の系譜をたどりながら、その脆弱性を乗り越える道を考える。

第4回　5月2日（金）

福間良明［立命館大学産業社会学部教授］

沖縄・広島・長崎はいかに記憶され、
いかに語られてきたか
―記念日から考える

沖縄戦の終戦の日は、6月23日「慰霊の日」とされる。だが、新聞でこの日が大きく扱われるようになるのは、1960年代に入ってからである。沖縄ジャーナリズムが扱う8月15日は、日本本土での論じられ方とは異質であった。広島や長崎に目を転じてみると、戦後初期の原爆被災日（8月6日・9日）には、追悼のみならず、むしろ祝祭的な雰囲気も多く見られた。戦争をめぐる「記念日」の戦後を跡付けながら、「戦争の記憶」の歪みを問い直し、ひいては今日の「戦争の語り」のあり方について考えてみたい。

第5回　5月9日（金）

白井洋子［日本女子大学文学部教授］

ベトナム戦争とは何だったのか

若い世代には遠い過去になりつつあるベトナム戦争は、ベトナムの側からはアメリカ戦争と呼ばれた。米軍は、最大時（1969年）54万人もの兵員をベトナムに送り込み、6万人近い戦死者を出した。若い米兵にとっての「戦場の記憶」「戦争の悲しみ」という視点から、この戦争を捉えてみる。

第6回　5月16日（金）

菅英輝［京都外国語大学客員教授］

アメリカ帝国の過去・現在・未来

「アメリカ帝国」論は論争的なテーマであり、アメリカは「帝国」であるか否かをめぐって合意があるわけではない。また、アメリカは「帝国」だとしても、植民地を保有するヨーロッパ型の帝国とは区別すべきであるという考え方もある。本講義では、「アメリカ帝国」の特質を整理したうえで、「アメリカ帝国」形成史の時期区分を過去（「陸の帝国」、「海の帝国」、「冷戦期の帝国」）、現在（「冷戦後の帝国」）の4つの時期に区分し、現在の「アメリカ帝国」の現状をどう理解したらよいかの試論を展開したい。最後に、「アメリカ帝国」の行方について若干の展望を試みる。

第7回　5月23日（金）

関下稔［立命館大学名誉教授］

世界経済は戦争をやめられるか
―21 世紀世界の向かうべき道

21世紀世界は不透明である。東アジアにおいては米中に加えて、日中、日韓にも波風が立っている。北アフリカから中東における春もつかぬ間に過ぎ、依然として事態は深刻である。ヨーロッパでは経済危機の深刻さが政治的な不安定さを呼んでいる。もとより、ラテンアメリカ、アフリカではグローバル化の進展から来る様々な問題が堆積している。この講義ではこうした世界情勢の下で、世界の善意ある人々の願いである平和の筋道がどのように展望できるか、ともに考えてみたい。

第8回　5月30日（金）

市川ひろみ［京都女子大学法学部教授］

兵役を拒否するということ

誰かがあなたに不正を行うように命じたら、あなたはどうしますか。「命令だから仕方ない」と従うでしょうか。古来、多くの人々が国家の命ずる兵役を拒否してきました。また兵士や軍人であっても、違法な命令には従わない人たちもいます。彼らの行いがどのように平和を創り出してきたのか、そして、私たちにとって「兵役を拒否すること」はどのような意味があるのかを考えます。

第9回　6月6日（金）

原田太津男［龍谷大学経済学部教授］

人間の安全保障とは何か

人間の安全保障（human security）とは、ポスト冷戦期に世界で生じた紛争と貧困の解決をめざして生まれた新しい概念です。この概念は、人間社会につきまとう深刻な不安全状態への包括的な対処をめざし、国家ではなく人びとの安全のために、「保護と能力強化」という手法によって問題を克服しようと提唱しています。日本は近年これを軸に援助や国際支援などの外交を展開してきました。本講義では、人間の安全保障と平和の関連を探ってみましょう。

第10回　6月13日（金）

嘉指信雄［神戸大学大学院人文学研究科教授］

“非人道的”兵器から考える戦争と平和
―劣化ウラン弾問題を中心として

過酷な被害を無差別的に与える兵器は、“非人道的”として国際法により製造・使用が禁止されている。毒ガスなどだ。戦争の悲惨を少しでも軽減しようとする国際社会の意志の表れである。しかし劣化ウラン弾は禁止には至っていない。衝突によって放射性微粒子が環境中に拡散されるが、人体への有害性の実証が壁となっているのだ。放射性廃棄物の軍事利用である劣化ウラン弾を、“核時代がつれてきた影”として、3.11後の今、改めて問い直す。

第11回　6月27日（金）

本田雅和［朝日新聞南相馬支局長］

戦後ジャーナリズムの
原点と現在地

戦争と天皇制国家主義に協力し、推進してきた戦前ジャーナリズムへの反省なしには、日本の戦後ジャーナリズムは、そもそもその存在を許されなかったはずだ。ジャーナリズムとはただ単に日々の出来事を伝えることではない。特に同時代の戦争体制の、何を、どう伝えるか――そこに、一市民すぎない、だからこそ貴重な、ジャーナリスト一人ひとりの視点、思想、生き方が問われている。

第12回　7月4日（金）

岡野八代［同志社大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科教授］

フェミニズムの平和構想
―安全保障の神話からケアの倫理へ

人は誰でも、誰かから生まれ、誰かに世話され育まれるがゆえに、実は非常にもろい存在である。しかしながら、これまでの政治学は人間の脆弱さには向き合わず、むしろ、軍事力を配備することで、この事実を見えなくしてしまっていた。講義では、女性たちの経験から生まれた「ケアの倫理」の意味を理解しながら、まず自分の身体や他者との関係性を振り返ることで、「安全保障」とは異なる平和の在り方、あるべき平和的世界について考える。

第13回　7月11日（金）

名和又介［同志社大学名誉教授］

賀川豊彦の軌跡
―協同組合から平和をつくる道筋

賀川豊彦は20歳から神戸のスラム街で献身した人物であり、いわば日本のマザーテレサにあたる。弱者救済のため、労働運動・農民運動・協同組合運動・災害救助活動などに従事した。その延長として平和運動にも貢献し、日本人で初めてノーベル平和賞にノミネートされた。この講義では、受講生とともに賀川の諸活動と平和運動について考えてみたいと思う。

第14回　7月18日（金）

小林和美［大学生協京滋・奈良ブロック事務局次長］

大学生協はなぜ平和をめざすのか
―大学生協の歴史と
”Peace Now舞鶴”の取り組みから

「より良き生活と平和のために」―大学生協はこのスローガンのもと様々な活動を進めてきた。現在に続く大学生協が生まれた歴史背景と、京都の地元から平和を考える取り組み “Peace Now舞鶴”を通して、平和について一緒に考えてみたい 。

第15回　7月25日（金）

君島東彦［立命館大学国際関係学部教授］

六面体としての憲法９条
―脱神話化と再構築

いま日本国憲法９条を改正すべきか、擁護すべきか、熱を帯びた議論がなされている。でも、日本人は本当に憲法９条のことを理解しているだろうか。この講義は、９条を６つの視点、すなわち、ワシントン、大日本帝国、日本の民衆、沖縄、東アジア、世界の民衆という６つの視点から見ることによって、９条の全体像を浮かび上がらせようとするものである。それは同時に、９条を脱神話化し、我々が９条をつかみ直すための試みでもある。

教科書として、君島東彦・名和又介・横山治生編
『戦争と平和を問いなおす―― 平和学のフロンティア』（法律文化社）
を使います。
この本は、2012年度の本講座の講義にもとづいています。